楽しく美しいまちづくり通信…㊺

裸参りが年の始まり

一月二日（昔は旧暦の十二月二日）、例年この時期は、雪はまだ少ないものの、季節的に寒さは一番厳しいころです。

この日、市内の呑香稲荷神社（宮司小保内道彦さん）で裸参りが行われます。

この裸参りの始まりは明らかではありませんが、第二次世界大戦中は、戦勝祈願、武運長久、五穀豊穣、無病息災などそれぞれの思いを祈願するために行われていました。当時は、市内をはじめ、周辺の町村や県外から二百人も参拝者があったといいます。しかし、昭和四十年代に入って交通事情の悪化により、やむを得ず中断したそうです。その後十八年間裸参りは行われておりませんでした。

田口正晴さんの父臣悦さん（食堂経営）は、信仰が厚く、裸参りを是非、復活したいと稲荷神社にお願いし、十一年前から行われるようになりました。しかし、その間の急激な社会情勢の変化により参加する人は、今では七、八人と少なくなりました。

11年間連続1月2日に裸参りに参加する
田口正晴さん（40歳）
（福岡字長嶺）

正晴さんは、幼い頃から、裸参りのことを祖父やお父さんから聞かされていたこともあり、自ら裸参りに参加しようと思ったといいます。

裸参りは、二日の夕方、田口さん宅に集まり、男は褌やパッチ、女は白衣一枚を身にまとい、宮司さんのおはらいを受けてから、先ぶり太鼓を先頭に夜六時長嶺を出発します。わらじを履き、腰にしめ縄をまとい、御幣を持ち、鐘を鳴らしながら、身を切るような寒さのなか、呑香稲荷神社まで約二キロメートル目抜き通りをゆっくり歩きます。

正晴さんは、「寒ければ寒いほど気合いが入る、暖ったかい年は雪が溶けて足元がぬかって歩きにくい・・・歩いていて一番きついのは、路地から吹きつける風。岩谷橋のあたりは特にしんどいよ。それにもまして対向車が運んでくる風は特別だよ」と言います。

岩谷橋を過ぎると全身が寒さのため風の痛みさえ感じなくなり、くわえ紙も凍り、痛みを感じていた手足の感覚も無くなるそうです。それでも稲荷神社の大きな鳥居が見えると、一層身が引き締まるのを覚えるといいます。出発してから約五十分、六十一段の石段を一歩一歩踏み締めるように登り切ると、大勢の参拝客が迎えてくれます。

水ごりをする正晴さん

境内で水ごりを済ませ、本殿において家内安全、無病息災、五穀豊穣、商売繁盛などそれぞれの思いを祈願します。

正晴さんは、復活以来今年で十一年間、子供二人と休まず続けています。「数年前、風邪引いて三十八度位の熱があって、今年は参加できないなぁーと思った。でも、子供達が御参りするので、私も参加しました。御参りをしたら治りましたよ」また、「この裸参りが私にとってその年の始まりでもあるんですよ。これからもできるだけ永く家族で続けたい。そして、もっとたくさん参加してくれればいいですね」と話してくれました。

こよみ

12月11日～1月10日

★1月★

11日（土）鏡開き
12日（日）
13日（月）
14日（火）3歳児健康診査（市保健センター）
15日（水）二戸市成人式（市民文化会館）、小正月
16日（木）
17日（金）市民生活相談（市役所市民相談室）、防災とボランティアの日
18日（土）
19日（日）
20日（月）大寒
21日（火）4カ月児健康診査（市保健センター）
22日（水）市長と語ろう日（市長室）
23日（木）
24日（金）
25日（土）
26日（日）文化財防火デー
27日（月）
28日（火）一歳六カ月児健康診査（市保健センター）
29日（水）